

## 日本語の再発見

## ひらがな

平安時代になると、漢字を芸術的に表現する書道が盛んになり、三筆(嵯峨<sup>さあが</sup>天皇・橘<sup>はやなり</sup>逸勢・空海<sup>くうかい</sup>のこと)や三蹟(小野<sup>おの</sup>道風<sup>みちかぜ</sup>・藤原<sup>ふじわら</sup>佐理<sup>さしげ</sup>・藤原<sup>ふじわら</sup>行成<sup>ゆきなり</sup>の三人)などの書の名人が輩出した。

そのため、草書体の優美で平易な書体が、一つの新字体として定着するやうになった。これが“平がな”である。“平易な仮名”といふ意味であらう。因みに言へば、カタカナは“片仮名”で、漢字の一片で作られた仮名といふ意味である。

教養のある男性は、漢籍を読み、漢詩や漢文を作るのが、当時の常識とされてきたのに対して、和歌を作り和文を書くのが、女性の教養とされてきた。

優美な書体のひらがなは、女性の作る和歌や文章を書くのにふさはしかったので、盛んに女性の間で使はれ、初めは多かった字種や字体も次第に限られたものに定着して行き、明治時代になって、一音一字の現在の“ひらがな”になった。

ひらがなの基になった万葉仮名は次の通りである。

あ安 い以 う字 え衣 お於  
か加 き幾 く久 け計 こ己  
さ左 し之 す寸 せ世 そ曾  
た太 ち知 つ川 て天 と止  
な奈 に仁 ぬ奴 ね称 の乃  
は波 ひ比 ふ不 へ部 ほ保  
ま末 み美 む武 め女 も毛  
や也 い ゆ由 え よ与  
ら良 り利 る留 れ礼 ろ呂  
わ和 ゐ為 う ゑ恵 を遠  
ん无